

2014年1月5日 新年聖餐礼拝

説教 新しい創造

コリント人への手紙 第二 5章 13-19節

【クオリア?】

脳科学者・茂木健一郎氏は、「初詣をする日本人の多くは、決して何かのご利益を求めて初詣に行っているわけではない。基本的に初詣に行っても何かご利益があるとは思っていない。むしろ、その年自分が為さなければならぬことを前にして、心を整える。新しい自分になって新しい年に出会う出来事に対処するためだ」という内容のことを述べています。そして、「神仏に向かって無心に手を合わせたりすると、脳の中にある神経の新しい接続ができて、新しいクオリア(感じ)が脳内に作られる」と説明しています。つまり、初詣に行くと、「さあ、新しいスタートだ。今年がんばれそうだ」という感じが脳の中に生まれる。そう感じたくて、人は初詣に行くのだと言うのです。

【新しく造られた者】

ところが、神さまがしてくださることは、こういう「感じ」とはまったく別のことです。「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です」(17)。この「新しく」という言葉は、本質が新しくなるという意味で使われる言葉。私たちは「感じ」ではなく、本質的に新しくなりました。

それは、「キリストのうちにある」から。キリストに受け入れられたから。キリストに受け入れられてキリストのうちに入れていただいたからです。

お母さんのおなかの中の胎児のイメージでしょうか。胎児は、栄養や、血液や、酸素、要するにすべてをお母さんから受け取っている。お母さんが行くところにどこにでも、行く。そんなふうにお母さんと一つの胎児。そんなふうキリストのうちにある私たち。キリストとひとつの私たち。キリストの行くところへどこにでも行く私たち。絶えずキリストから、いのちを受け取り続けている私たち。そんな不思議なことが私たちの身に起こっているのです。

どうして、こんなことが私たちに起こったのでしょうか。それは「キリストの愛が私たちを取り囲んでいるから」(14)です。口語訳では、「キリストの愛がわたしたちに強く迫っている」。十字架の上で死ぬほどに強く。そんな愛が私たちを取り囲んでいる。私たちを胎児のご自分とひとつにせずにはいられない愛、ご自分のうちにおらせずにはいられない強い愛がここにあります。

【「新しい創造」計画】

カトリック教会の仙台司教区では、震災後2、3ヶ月というかなり早い時期に、復興への基本計画を発表しました。そのとき掲げられたみことばが「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です」(17)です。この計画はさらに、復活と言う言葉をこの聖句に重ねるように用いています。私たちにできることは、「被災された方々一人ひとりが、苦しみ・悲しみの淵から癒される復活の物語に寄り添わせていただくこと」だ、そういっています。「一人ひとりの復活体験に、現場でボランティア活

動をする人も小教区から傾聴活動に出かける人も共感」することだ、とも。

人々が立ち上がるためには、「新しい創造」が必要です。そしてその新しい創造は、ただ、人間が少しばかり変えられるというようなものではありません。主イエスは、死から復活されたお方。そして私たちが死から復活させることが出来るお方。ですから、激しい悲しみの中におられる人々、まるで死のような絶望の中にいる人々をも、「復活」させることができる。いのちの中へ連れ出すことができる、と信じ、そのために人々に寄り添うというのです。それは自らが復活のいのちである主イエスのうちにいる者だからこそできる働きなのです。

【キリストのために】

「また、キリストがすべての人のために死なれたのは、生きている人々が、もはや自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえった方のために生きるためなのです」(15)。

私たちは、キリストの強い愛に取り囲まれています。キリストのうちに取り込まれているのです。その私たちは、キリストのために生きたいと、心から願っています。キリストの願いが私たちの願いだからです。生きておられる神さまと共に働かせていただきましょう。私たちの持っているいのちの火であるキリストを、ろうそくりレーのように、私たちの家族や知人に手渡したいと思います。ご自身が誰よりもそれを願っておられるキリストがそうさせていただきます。

